

## 【貨幣的一般均衡における中央銀行および信用創造の取り扱い】 浦井 憲

Grandmont 1981 の Money and Value は政府貨幣は入るが「信用」概念は入らない。この場合の「信用」とは国家の信用である。この問題設定において、我々 (Kageyama-Murakami-Urai) の複数国家というモデル設定が生きる (為替問題) ことになる。ノイマンモデルでやろうとしているのは、グラモンの一時的な一般均衡での貨幣価値の保証 (消費者の期待) ではなく、生産条件のみで物の価値が決まる世界、すなわち非代替定理の成立する状況における、複数国家間での貨幣価値の決定問題なので、これは各国の金融財政政策および最終消費に自由度を与えた (ケインズ的な) 形での世界モデルの提供に、相当している。



なお、今回、塘先生が (翌日マルサス学会で) ご欠席のため、前回塘さんが触れようとしておられた支払単位数の問題にも少しだけ触れておく。塘先生のお話は、例えばマルクスの価値、生産価値、使用価値、交換価値といった価値形態問題において、その基底に置かれる「労働の価値」というようなところを、「支払い単位」という概念に置き換えることを通じて「見えてくるもの」、というところにあるのではないかと思われる。私は「支払い」の成立と「受け取り」の成立に、そもそも相違を見出す必要があるのか、今一つ理解不十分のため、当初からそれらを「決済」とまとめて言ってしまうているが、その立場で言うと、我々 (浦井・景山・村上) のノイマン・プロセスは、生産による価値決定 (非代替定理を通じたケインズの理論との往来) と「決済」の過程をプロセスとして厳密に記述する立場を、きちんとつなぐ (信用創造プロセスを含めた貨幣の取り扱いを一般均衡理論的にきちんと記述する) ための道具である。そして、この立場が臼井先生の言われるような問題を、純粹理論が取り入れる (少なくともケインズ的に取り入れる) ためには、間違いなく (マクロでのポストケインジアンのように頭から言って終わりの話ではなく) 確実な道具となるものと考えている。この場合、支払単位数史観が捉えようとしているところというのは、(ゼロではない価値を持った) 貨幣の「成立」が、それ自体は信用の形成としてまず、定まった価値の下での交換ということに、先立つ、という考え方と対応付けられるのではないか。今回の議論に合わせて、もう少し深く考えてみたい。